

# 一 書写学習の基本認識

## (1) これから求められる国語科書写の力

- ① 鉛筆・筆などの筆記用具について、正しい使い方の習得だけでなく、**目的に合わせて筆記用具を選択し活用していく**力が求められるようになった。
- ② 文字を正しく整えて書くことだけでなく、**場に応じて書く速さを意識して書く**力が求められるようになった。
- ③ 国語科の言語活動や、学校生活、日常生活に生きる書写として、**相手意識・目的意識をもって「伝え合う力」**につなげていく力がよりいっそう求められるようになった。
- ④ 新学習指導要領では、低学年で、**適切に運筆する能力の向上**につながるよう、指導を工夫することが求められるようになった。

## (2) 書写学習を進めるにあたっての基本的な考え方

- ① 硬筆による学習は、第一学年から第六学年まで通して行い、毛筆による学習は、第三学年から第六学年までで行う。
- ② 配当時間は、各学年とも**三十単位時間程度**である。
- ③ 学級の実態や学習効果を考慮して、硬筆・毛筆の関連指導を行ったり、書式教材を設けたりする。
- ④ **毛筆による学習は、硬筆による書写学習の基礎を養うためにあり**、毛筆で大きく書くことによって文字の筆順を理解させるとともに、字形の正確な認識を促し、文字を正しく整えて書くことができるようにする。
- ⑤ 硬筆と毛筆とを一体化した、関連的な指導計画や学習方法を工夫する。

時間数は確保されていますか？

毛筆書写の究極の目標は「**日常に生かす**」ことです。

## 二 書写学習で大切にしたいこと

- ① 正しい姿勢・正しい持ち方を身に付ける。
- ② 文字を分析して見る力を付ける。
- ③ 用具を大切にする心を育てる。



日常の学習や活動の場面で  
生かす

- ① 正しい姿勢・正しい持ち方を身に付けるために・・・

### 正しい姿勢

- ・足の裏を床に着けてから、少し開く。
- ・椅子と背中の間が少し空くように浅く座る。
- ・背中を伸ばし、机とおなかの間を少し空ける。
- ・右手は右胸の前に、左手は左胸の前で紙をおさえる。

これらの前段階として、机と椅子  
の高さ調節を学級開きと同時に  
してください。

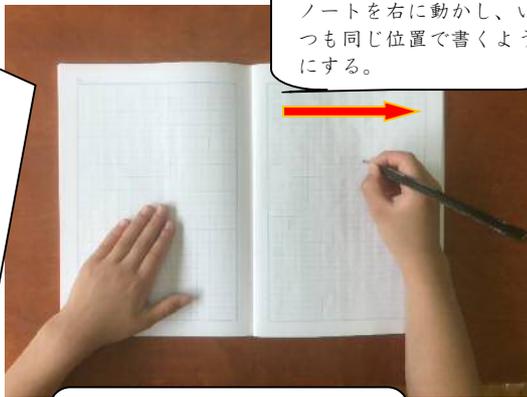
正しい姿勢を身に付けるための支援

・良い姿勢の合言葉を唱える。(指導書のDVDを活用する)

教科書に「良い姿勢の合言葉」が載っています。書写学習に限らず、書く学習の時は「合言葉」を唱えて定着させると良いでしょう。また、良い姿勢の絵や写真を教室に掲示し、文字を書くときなどに声かけし、意識づけるようにしましょう。



書き進めていくにつれてノートを斜めに置いたり姿勢を崩したりして書く子がい  
ます。書き進めるときは、ノートやプリントを動かし、姿勢はいつも正しく。



ある程度書き進んだら、  
ノートを右に動かし、い  
つも同じ位置で書くよう  
にする。

左利きの児童は反対に  
(利き腕の前方で書く。)

- ・足の裏を床につけて、少し開く。
- ・お腹と背中にこぶし一つ分くらい  
空ける。
- ・腰をぴんと立てる。
- ・肘を上げる。
- ・紙を軽くおさえる。



# 正しい持ち方

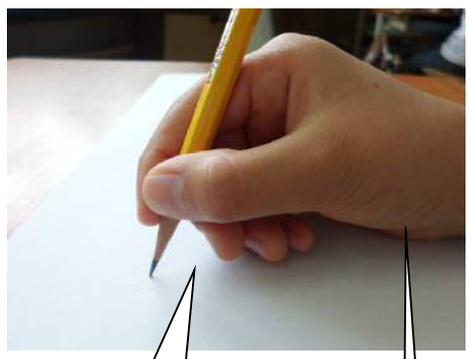
☆ 正しい持ち方を身に付けさせるにあたって、ふまえておかなければならないことは、就学前において、すでに全ての子どもが筆記用具を持って「書く」経験をしているので、ある程度「自分の持ち方」が定着しているということです。しかも多くの場合、正しい持ち方ではありません。これを正しい持ち方に直すには、指導者の根気強い指導と、子どもの「正しい持ち方で書く」という気持ちが必要で、しかも、学年が進めば進むほど、持ち方を直すことは難しくなっています。

しかし、正しくない持ち方を続けていると、手指に力が入りすぎて、すぐに書き疲れ、集中力が低下したり、姿勢が悪くなったり、字形が整えられなかったりすることにつながります。

正しい持ち方を身に付けることは、すべての教科にも影響し、もっと言えば、その子どもたちの将来にも関わってくるほど大切なことなのです。なかなか直せなくても、正しい持ち方とはどんな持ち方かを知っておくだけで、かなり違ってきます。では、どのような手立てがあるのか、以下を参考にしてください。

## 正しい持ち方を身に付けるための支援

### ① 正しい持ち方の絵や写真を教室に掲示する。



ここが支点

全学年の書写の教科書にイラストが載っています。低学年の教科書には「持ち方の合言葉」も載っています。基本的に、人差し指と鉛筆が寄り添うように持つことが大切です。また、手の中に空間ができていても重要です。この空間があることで、一つの支点に対する可動域が広がり、楽に持って書くことができます。

## 筆の持ち方



ここに空間があることが大切です。

これは「一本がけ」の持ち方です。

② 正しい持ち方を意識づける用具を使う。

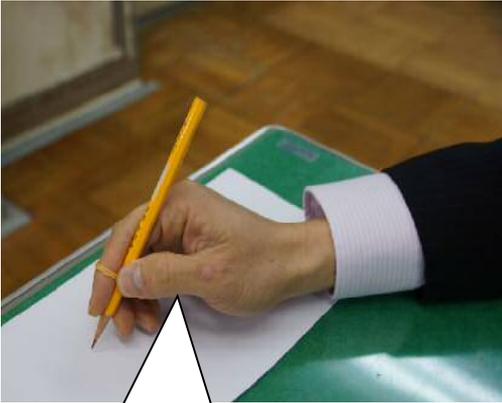


様々な文具メーカーから、鉛筆の持ち方を正しくするための矯正具（鉛筆ホルダー）が安価で販売されています。形もいろいろあり、また、左利き用もあります。

また、鉛筆も、斜めに線が入っており、その線に合わせて指を置いていくと正しい持ち方になるものや、三角軸の鉛筆、また、低学年の子どもの筆圧が弱いことを考慮して、軸や芯が太くなっている鉛筆もあります。濃さはB以上のやや濃いめのものの方がいいでしょう。

このようなホルダーや鉛筆を人数分用意しておき、硬筆書写の学習の時だけ子どもたちに使わせて意識づけることも有効です。

③ こんな方法も・・・。



人差し指の第一関節と鉛筆を輪ゴムで軽くとめます。

あまりきつくとめないようにしてください。

人差し指と鉛筆が寄り添う形になり、正しい持ち方に近づけることができます。これだとお金もかかりませんね。



ティッシュペーパーを二〜三枚丸めて持ったまま鉛筆を持ちます。この方法は、手の中に空間を作ることが意識づけるのに有効です。この空間があることで鉛筆の可動域が広がり、力まずに書くことができます。

力まずに書けると、書き疲れず、集中力も持続します。

これもお金をかけずにできる方法の一つです。



ここに空間があることが大切です。

これは「二本がけ」の持ち方です。

毛筆の持ち方については、後述します。

ちなみに・・・

※短すぎる鉛筆を持っている子どもを見かけることがあります。大切に使用しているのはいいことですが、人差し指に載らないほど短い物は、正しい持ち方ができません。

※ピンピンに尖らせた鉛筆は、書き始めたときに先が崩れやすくなります。少し丸みを残して削るように声をかけておくようにしましょう。

※硬筆書写用の柔らかい下敷きが販売されています。硬い下敷きや机の上で書くより、少し引っ掛かりがあり、太く、濃いめに書くことができます。丁寧に書くための手立てとして有効です。

※姿勢や持ち方の指導は、平日頃からの声かけが大切です。正しい姿勢や持ち方がなぜ大切なのか、保護者の方にも話し、家庭でも心がけ、定着させたいものです。

## ② 文字を分析して見る力を付けるために

「文字を分析して見る」とは、平仮名・片仮名・漢字、あるいは毛筆・硬筆に関わらず、基本点画や文字の組み立て方、画の方向や長さなどをどうすれば字形が整うのか、一文字ずつ詳しく見て、そこから得たことを自分の日常の文字に生かそうとする力です。

ところで、なぜ、小学校で毛筆書写学習があるのでしょうか。それは、毛筆を使って大きく腕を動かして書くことによって、文字の筆順や「とめ」「はね」「はらい」「おれ」「まがり」「そり」といった基本点画を意識づけ、さらに字形を正しく整えて書くことができるようにするためにあります。そしてそれを硬筆（日常）に生かすことが最も大切な目標です。ここが高等学校以降の「書道」と違ふところです。

『永』の漢字には、多くの基本点画が含まれているため、昔から書写学習や書塾の中で練習題材として広く使われています。



※一つの文字でも  
気付きはいっぱい  
出てきます。

新出漢字の学習の際、筆順、画数、その漢字を使った熟語だけでなく、その漢字の成り立ちや字形（基本点画・画の長短・方向・組み立て方など）についても指導してください。

ちよっと一言・・・

書写学習での教師の言葉、児童の言葉に注意しましょう。

(例)

習字道具↓書写用具  
お手本↓教材文字

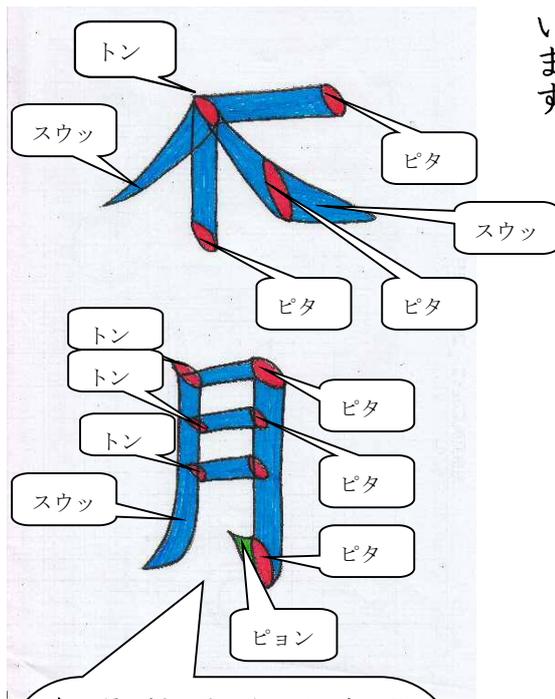
「木」の横線↓「木」の一画目の横画  
清書↓まとめ書き

三画目と四画目の左はらいの  
長さや方向はどうか？

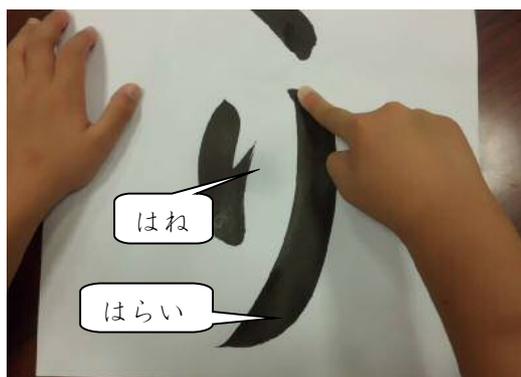
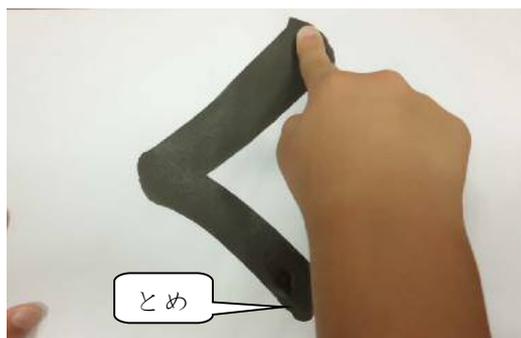
三画目は二画目に付いていな  
いけど、四画目や五画目は付い  
ているね。

三画目と五画目の終筆の高さ  
は同じくらいだね。

同じことは、平仮名にも言えます。一年生の教科書にも「しよしゃのたいそう」があり、基本点画の定着を図っています。



ここに書かれている「トン」「スウツ」「ピタ」などの言葉を声に出しながら書くことで、とめ・はね・はらいなどの基本点画を意識づけれます。これは、平仮名だけでなく、新出漢字の学習の時にもぜひ取り入れてください。

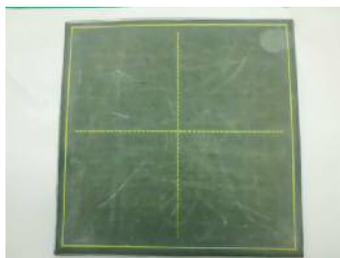


文字の形を正しく整えるための手立ての一つとして「マスのどこから書き始めるか」

※指でなぞって動作化することで、基本点画を定着させる。を考えることはとても重要です。

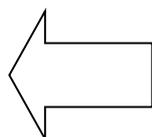
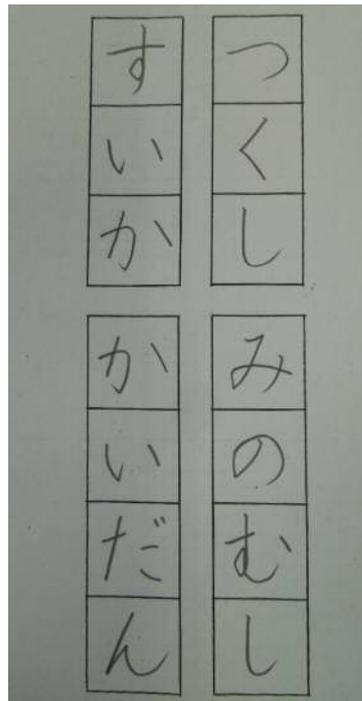
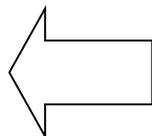
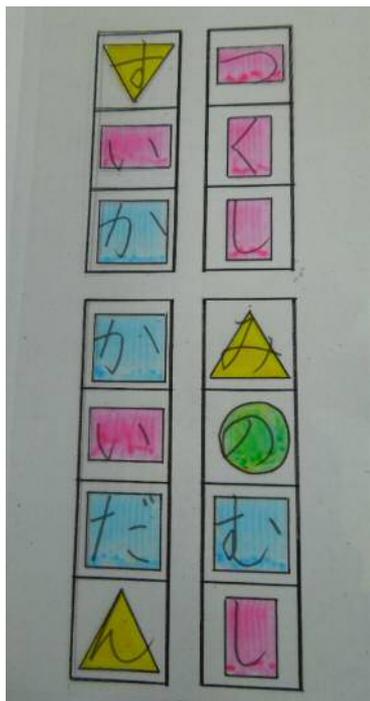


「1のへや」から始める文字が多いことに気づかせます。



新しく平仮名や片仮名、漢字を学習するとき、ぜひ「マスの十字の野線の入った小黒板を使ってください。そして文字そのものだけでなく、「とめ」「びた」「はね」「びん」「はらい」(す、う)などの言葉や、マスのどの部屋から書き始め、どの方向へどんな長さで運筆するのか、といった、書写的要素も指導してください。

◎文字の外形や組み立て方をとらえるために、透明のシートを活用しましょう。



特に平仮名や片仮名の場合、文字の外形をとらえることはとても重要です。

上の写真のように、自分が書いた文字の上に、外形を示した透明シートをのせ、基準に合っているかを確かめます。この時、マス目に合った文字の大ききで書いているかについても確かめるようにします。

また、文字の組み立て方についても、上下・左右・中と外など様々なものがあります。これも透明シートによる確かめが有効です。

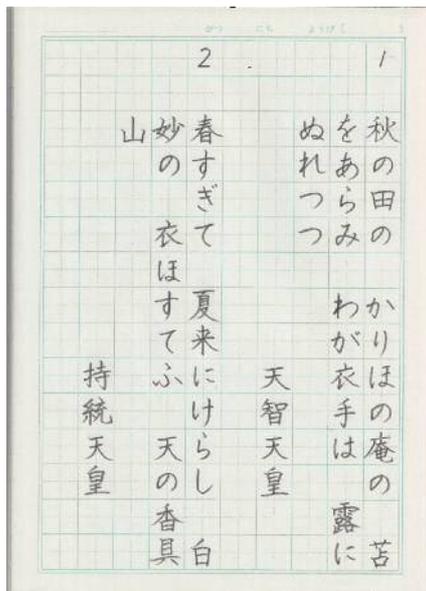
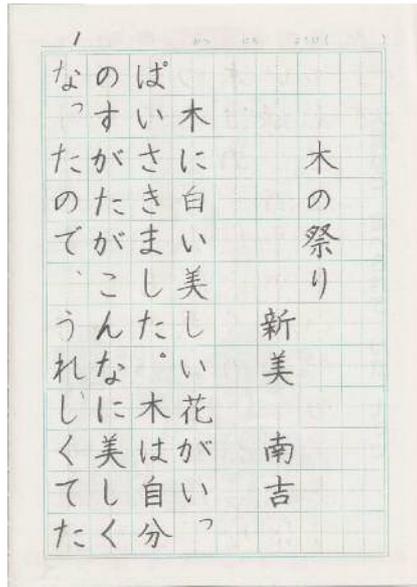
透明シートへのコピーは、トナーが落ちやすいので、色を塗るときは裏から塗ること、そして擦れないように注意が必要です。

透明シートの使い方や形式は子どもたちの実態に合わせていろいろ工夫してください。

字形に気を付けて書こうとする意欲や態度を養うために・・・（日常的に続けていただきたいこと）

◎ 前にも少し述べましたが、新出漢字の学習の際、とめ・はね・はらいなどの基本点画や文字の組み立て方など、書写的要素を取り入れると良いでしょう。また、その時、子どもたちと向かい合って、教師は左手で「とん」、「すうーっ」などの声と共に一画ずつ大きく空書します。それを子どもたちが一緒に鉛筆を持つ方の手を出して、空書します。筆順の確かめや字形・基本点画の確かめに役立ちます。その漢字の成り立ちにふれると、子どもたちの興味・関心を引き出すことができます。

◎ 宿題に、「書き写し」（視写）を取り入れると良いでしょう。子どもたちがよく使っている学習帳に、物語や詩などを書き写し、それを印刷して子どもたちに配布します。罫線だけのページを印刷して配り、そこに書き写します。



☆「丁寧」にそっくり「書く」ことを続けることで、字形が整ってきます。

☆優れた文学作品に触れることもできます。

☆マスの使い方を学べます。

☆物語が終わった時、自筆による一冊の本が出来上がっています。

物語を一回に一ページずつ書き写していきます。物語の内容や文字（マス目）の大きさについては子どもたちの学年の発達段階に合わせて書かせます。初めは雑に書いたり字形が整えられなかったりしていた子どもも、教師の励ましの声かけ次第で格段に文字が上達します。特に字形を整えて書いている子どもには、ハナマルだけでなく、茎や葉、蝶などを書き加えたり、温かいコメントを書いたりして褒めます。普段雑に書いてしまう子どもにもいますが、少しの上達でも見つけ、励まします。この積み重ねが大切です。（「手本」はぜひ教師が自ら書いて、自分の書字力向上を図りましょう。どうしても自信が無い場合は、書写教育研究会にご連絡ください。

### ③ 用具を大切にすることを育てるために

以前、国語の教科書に『一本の鉛筆の向こうに』という教材文がありました。鉛筆の材料となる木を切る仕事をしている人や、鉛筆の芯の材料となる木炭を掘り出す仕事をしている人にスポットを当て、一本の鉛筆の向こうに、それを作る人々の働きがあることをテーマにした説明文だったかと思います。

さて、これを毛筆書写の学習に当てはめてみましょう。毛筆で文字を書くときになくはならないものがケースにたくさん入っています。とりわけ、筆・墨・硯・紙の四つは「文房四宝」といって、特に大切にされてきました。鉛筆と同じように、それぞれにその用具を作る職人がおられ、心を込めて作られたその用具を私たちは使っています。その職人さんたちの心を、ぜひ子どもたちにも伝えてほしいのです。用具を大切にすることは、自分の文字も大切にします。大切に書かれた文字は、それを見る（読む）人の心にも響きます。仮に字形があまり整っていないなくても、雑に書かれた文字とははっきり違いがあります。「へた」と「雑」は違うのです。毛筆書写は如実にそれが表れます。高学年を担任されている先生方は一度、子どもたちの書写用具を見てください。バサバサ・カチカチの筆、クシャクシャの下敷き、墨のカスがこびりついた硯・・・などということになっていないでしょうか？一概には言えませんが、書写用具を丁寧に使っている子どもたちの文字は丁寧で、字形も整っていることが多いような気がします。用具を大切にすると子どもにも育てたいものです。

ここでは、とりわけ先ほど述べた「文房四宝」に焦点を当て、その作られ方や正しい扱い方について説明します。

#### 一 「文房四宝」とは、**文房具の四つの「宝」**です。

筆・墨・硯・紙の四つを「文房四宝」と言います。それぞれの作られ方については、筆は三年生、墨・硯・紙は五年生の教科書に載っています。以下、その一つ一つについて簡単に解説していますので参考にしてください。また、先生方ご自身でも、ぜひ文房四宝について調べたり製造されているところへ見学に行ったりして、教材研究をして、子ども達に伝えてやってください。書道用品を扱うお店でも詳しく説明してくださいませよ。

# 筆

馬・山羊・イタチ・ウサギなど様々な動物の毛や、鳥の羽根、竹、ナイロンなど、毛の色、材質や大きさ、弾力は多種多様にあり、価格にも大きな差があります。日本製のものの他に、中国製のものも多く出回っています。子どもが使うのには、やや短めで弾力のある、馬の毛の筆（一般的に茶色い毛の筆）がいいかと思えます。値段的には大筆で500円〜1000円くらい、小筆は200円〜500円くらいのものでいいと思います。同じ材質でも職人さんの経験値によって値段も変わるようです。値段に関係なく、大切に扱うことで長期間使うことができます。

大筆は、初めて使うときは、フノリで固められているので、穂先から少しずつ丁寧に指でしごき、ほぐしていきます。三分の二くらいほぐして使いますが、「使い終わって洗う」を繰り返していくうちに毛の根元までほぐれていくと思います。筆の毛のためには全部ほぐれていた方がよいそうですので、わざわざ固め直す必要はありません。

使い終わったら、学校では瓶などの容器に汲んだ水でゆすぎ、反故紙でふき取ります。その時、毛の穂先がそろうようにしていきます。そして、筆巻きに巻いて持ち帰り、その日は「筆洗い」を宿題にします。各家庭に協力を呼びかけ、筆を洗ってもいい場所を子どもに伝えてもらいます。筆にとって一番理想的な洗い方は、流水の中に筆を入れ、根元から穂先の方へ、親指と人差し指でもみ洗いするように動かすことを繰り返します。軸に埋め込まれている毛にしみこんでいる墨液がどんどん出てきます。おおよそ墨液が流れたら、反故紙でふき取り、穂先を下に向けて吊るして乾かします。乾いたら筆巻きに入れておきます。これで次回も気持ちよく使えます。洗い忘れていたり、洗い足りなかったりすると、墨で筆の穂が固まり、次回大変使いにくくなります。また、洗った後の乾燥が十分でないまま片付けるとカビがついてしまうことがあります。

小筆は、大筆と同じように洗ってはいけません。小筆は穂先から約5ミリくらいだけしかほぐしませんから、水洗いすると根元まで全部ほぐれてしまい、使えなくなってしまうので、小筆を使い終わった後は、反故紙を水で少し濡らした所で、穂先をそろえながらふき取るだけで結構です。

なお、筆を購入したときについているキャップは、筆を一度使い始めたならもう御用済みですから処分します。使い終わってまたかぶせると、カビの原因になります。

大筆を持つ場所は、軸の中央あたりで、しっかり立てて持つようになります。（垂直より少しだけ倒す程度）です。また小筆は、鉛筆と同じ持ち方ですが、少し立てて持ちます。手を載せる所に紙を敷いておくと手を汚さずに書くことができますね。



根元から穂先の方へ、指でもむように洗う。

筆の持ち方



二本がけ



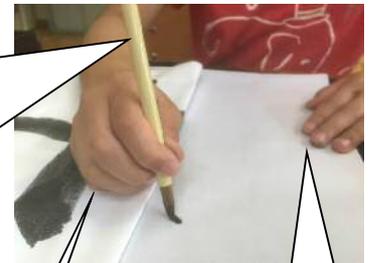
一本がけ

筆をかなり倒して書く子どもがいます。筆をしっかり立てて書くように、日頃からの声かけ、意識づけが大切です。この図は三年生以上の全ての学年の教科書に載っていますので、書く前に姿勢と持ち方ができているか、確認するようにします。教室掲示しておくのもいいですね。



ぜひ、子どもたちの名前を書いてプレゼントしてください。一枚の半紙を十二等分（縦二列 横六列）して、名前を書き、一人分ずつ切り取ってラミネートします。ケガをしないように角を丸く切ります。書写が不得手な方は、「正楷書体」などのフォントで入力してプリントしていただいてもいいです。大切なのは「名前も丁寧に書く」ことです。でも「先生の手書き」は嬉しいプレゼントですよ。

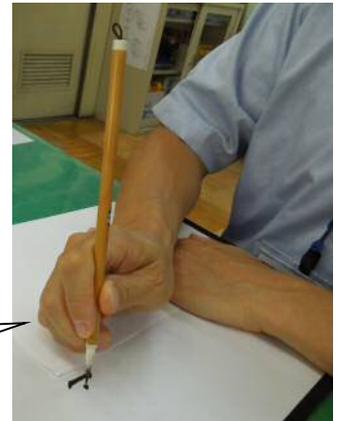
筆に墨を含ませて、書き始めようとするとき、余分に含ませた墨を、筆を振って落とそうとする子どもがいます。筆を振ると周りに飛び散ります。硯の端で穂先をそろえながら余分な液を落とします。



鉛筆よりも立てて持つ。

紙を軽くおさえる。

半紙の上に軽くのせる。



左手の甲に右手をのせて書く方法もあります。（枕腕法）  
ちんわんぽう

# 墨

墨には、大きく**油煙墨と松煙墨の二種類**あります。油煙墨は、菜種油やごま油などの油を燃やし、出てきた「すす」と動物の骨や腱、皮などを原料にしてできた「にかわ」、そして香りのもととなる「香料」を混ぜ、よく練って、木の型に入れ、大きさを整え、乾燥させ、表面を磨いてできています。一方、松煙墨は、松の木を燃やして出てきた「すす」と「にかわ」、香料を混ぜて練り、木の型に入れ、大きさを整え、乾燥させ、表面を磨いてできています。すり口に光沢があるのが油煙墨の特徴です。そして松煙墨は「青墨」とも言われ、墨の色は「青っぽい黒」になります。油煙墨はその原料となる油の種類や保管期間などによって違うようです。

墨は冬の寒い間しか作ることができません。製墨会社によっては、墨作り体験として、まだやわらかい墨を握ってそのまま乾燥させた「握り墨」をさせてもらえるところもあります。

小学校では、書く時間の確保のために、墨液のみを使って学習していることも多いようですが、書写用具のセットの中に墨が入っているのに使わずじまいはもったいないですし、墨を購入した意味がありません。大切な伝統産業の一つである墨を使って、**短時間でも磨る時間を設け、心を落ち着かせて学習に臨む**ということを是非実践してほしいものです。硯の「うみ」に墨液を入れ、**短く（おか）にスポイトで数滴水を落とし、そこで墨を磨って、磨り終わったらその液を「うみ」に入れるようにするとよい**でしょう。

また、墨には、にかわが含まれているため、磨り口が濡れたまま箱に入れてしまうと貼りついてしまいますので、磨り終わったら磨り口を拭いてから片付けるようにしてください。

# 硯

硯は主に中国で作られているものが多く売られています。値段も大きさも様々です。でも、日本でも規模は大きくありませんが、宮城県、山梨県、山口県、三重県など、各地で採石され、作られています。しかし、値段的にはかなり高級なものが多いようです。また、宮城県で作られている「雄勝硯」は、二〇一一年三月に起こった東日本大震災で甚大な被害を受け、生産が停止していましたが、職人さんたちの熱い思いのもと、少しずつ復旧し、生産され始めています。そんな職人さんの思いについても、子どもたちに伝えたいものです。



宮城県産 雄勝硯



墨の磨り方は二通りあります。

また、硯は基本的に、半永久的に使えるものですが、やはり手入れが必要です。墨と硯は、大根とおろし金のような関係で、硯をよく見ると鋒銚という粒があり、それで墨が磨れるようになっていきます。しかし、使っていくうちにだんだん硯がすりへって、磨れなくなってくるので、硯用の砥石で磨き、鋒銚を立たせ直します。硯を使い終わった後は柔らかい布などで隅々まできれいに洗って乾かしてから片付けます。

最近の書写用具セットの中に入っている硯は、ほとんどプラスチック製です。軽いし、落としても割れにくく、手入れも簡単、しかも墨を磨ることもできます。確かに便利ですが、もはや「工業製品」になってしまっていて、少し残念な気がします。大量生産できる工業製品としての硯では職人さんの思いに触れることはできません。石の硯とプラスチックの硯は値段的にはほとんど同じですし、セットを購入されるとき、硯だけ石のものとの交換されるのもいいと思いますが、無理ならせめて本物の硯を子どもたちに見せてやってください。もしかしたら硯の生産の存亡にも関わってくるかもしれません。

また、セットの中の硯は表裏両面が使えます。墨液だけを入れて使う面は「うみ」の部分が広く、筆をならす突起がついているものがあります。その裏の面は墨を磨ることができるので、「りく」の部分が広がっています。使い分けがしっかりできるようにご指導ください。

## 紙

紙、とりわけ毛筆書写で使う紙は、「こうぞ」「みつまた」などの植物の繊維から作られます。水の中にある植物の繊維をすのこをゆすりながらからませ、板にのせ、日光で乾かして完成させます。日本では、岐阜県的美濃、福井県の越前、鳥取県の因州、愛媛県の伊予などが和紙の名産地です。中国でも竹や藁などで作られています。日本産のものと比べると繊維が短く、少し弱い紙になります。でも、中国産の紙は書道をする人にとっては、墨が浸透しやすく、にじみやかすれがきれいに出るものも多いので愛用している人も多いです。小学校ではにじみが少なく、早く乾き、書きやすいパルプの半紙が多く使われています。しかし、値段もあまり変わらず、滲みにくく、滑りにくい和紙も多く売られていますので、一度試されてはいかがでしょうか。書写の評価とは無関係ですが、作品が上品に感じられます。

また、半紙は手漉きのももありますが、ほとんどは機械漉きです。とは言え、やはり半紙一枚にも植物がつかわれているのですから、大切にしておきたいものです。ちょっとだけ書いて、失敗して、捨てて、. . . は、もったいないです。一枚の半紙にたくさん書いて練習させてください。よく二枚重ねて書いてしまっただけという子どもがいます。汚した一枚は練習用紙として使うなど、無駄遣いの無いようにご指導ください。四十五分の限られた時間の中で書けるのは多くても四〜五枚までだと思えます。最後に書く「まとめ書き」は少しの緊張感を持って書かせたいものです。

# 三 毛筆書写指導の導入

三年生から始まる毛筆書写の指導。初めて書写用具を使う子どもも多いと思います。用具の使い方については、本資料や教科書に書かれていますので、それを活用させていただきます。初めの約束（準備・後片付けなど）をきちんと伝え、それを徹底させることがとても大切です。ここではより具体的に毛筆書写の導入の指導について紹介します。

## 毛筆書写の導入指導

- ① なぜ毛筆の書写の学習があるのか。
- ② 毛筆書写学習で大切にすること。
- ③ 用具について知る。
- ④ 用具の準備の仕方を知る。
- ⑤ 用具を実際に使ってみる。
- ⑥ 用具の後片付けの仕方を知る。

この時に学習したことをしっかり覚え、徹底していくことが大切です。ですから、最初は二時間くらいかけて、じっくり丁寧に指導していただけたらありがたいです。

特に、準備・書くとき・後片付けの約束を徹底しないと、机も床も、用具も手も汚れてしまうことになります。墨液は基本的に一度衣服などに付くと洗濯しても取れません。自分の服ならともかく、友達の衣服を汚すと、トラブルの原因になってしまうことも考えられます。正しい使い方をしていたら、衣服も手も汚すことはありません。最初の指導が肝心です。

## ① なぜ毛筆の書写の学習があるのか。

なぜ普段の生活では使うことがない毛筆を学校で学習するのか、子どもたちに考えさせてください。そしてこの資料の最初に書かれている、「文字を分析して見る力をつけるために」の所を参考に、子どもたちに伝えてください。

毛筆を使って大きく腕を動かして書くことによって、文字の筆順や「とめ」「はね」「はらい」「おれ」「まがり」「そり」といった、基本点画を意識づけ、さらに字形を正しく整えて書くことができるようになるためにあります。そしてそれを硬筆（日常）に生かすことが最も大切な目標です。

## ② 毛筆書写学習で大切にすること

これも先述したことです。子どもたちには、これもしっかりと伝えてください。

正しい姿勢・正しい持ち方を身に付ける。  
文字を分析して見る力を付ける。  
用具を大切にすることを育てる。

この三点は毛筆に限らず、書写学習全般にわたって大切にしたいことです。とりわけ毛筆はノートに書く文字よりはるかに大きく書くことになるので、腕を大きく動かさなければなりません。その「大きく腕を動かす」ことが文字を分析して見る力の向上につながります。もちろん、毛筆は生活のいろいろな場面で生かすこともできます。その点についても伝えてください。

## ③ 用具について知る。

先述した「文房四宝」について、この資料に書かれていることやご自身で調べられたことなどを子どもたちに伝え、どの用具にも、それを心を込めて作っている職人さんがいることについて考えさせてください。できればいろいろな大きさ・形の「文房四宝」を実際に見せてやってみてください。実物が無理なら写真などの資料でもいいと思います。子どもたちが書写用具について関心を持ち、大切に使う心と心が育てば嬉しいですね。

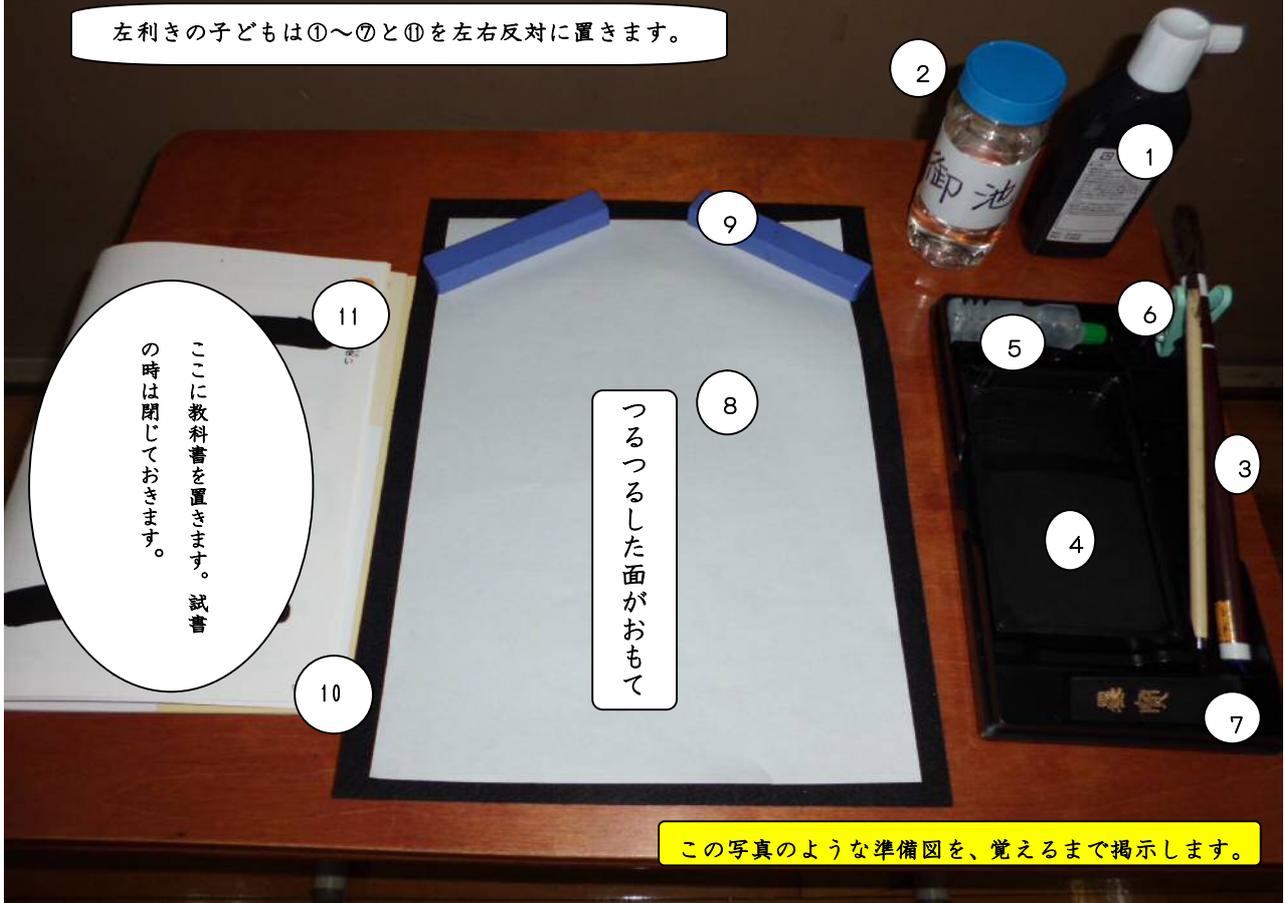
その他の、文鎮、下敷き、筆置き、墨液など、セットの中に入っている用具についても、その名前と正しい使い方を指導しましょう。

## ④ 用具の準備の仕方を知る。

用具の名前を覚えたら、いよいよそれらを机の上に正しく置いていきます。三年生の教科書には、「はじめの学習」として、置き方が写真で示されていますが、書写教育研究会でも置き方を考えてみましたので参考にしてください。

また、書き終わった半紙を「紙ばさみ」にはさむという方法が教科書に紹介されています。教室中、床に半紙だらけで歩けないということがないようにするための良い方法です。ぜひ子どもたちに作らせてください。

左利きの子どもは①～⑦と⑩を左右反対に置きます。



ここに教科書を置きます。試書の時は閉じておきます。

つるつるした面がおもて

この写真のような準備図を、覚えるまで掲示します。

- ① 墨液・・・使い終わったら必ずふたをします。
- ② ビン・・・佃煮やジャムなどの空き瓶でもいいです。ふたの付いた広い口の瓶を予め家庭に呼びかけて用意しておいてもらいます。落とすとして割れても飛び散らないように、布テープに名前を書いて貼ります。この中に水を入れておいて後で筆をゆすぐのに使います。
- ③ 筆・・・穂先が奥になるように置きます。
- ④ 硯・・・「うみ」が奥になるように置きます。
- ⑤ スポイト・・・瓶の水を吸い上げて硯に垂らし、墨を磨るのに使います。墨液は吸わないように。
- ⑥ 洗濯ばさみ  
写真のようにケースの縁をはさみ、筆置きにします。こうすると、ケースが墨で汚れにくくなります。
- ⑦ 墨・・・使ったら磨り口を拭きます。
- ⑧ 半紙・・・未使用の半紙は下敷きの下に敷いておくようにしましょう。
- ⑨ 文鎮・・・二個セットのものはこのように置き、長い一本のものは半紙の上部に置きます。
- ⑩ 下敷き・・・しわにならないように、丁寧に扱ってください。
- ⑪ 教科書・・・汚さないように気を付けてください。

# その他の準備物として・・・

○紙ばさみ・・・三年生の教科書に作り方が載っています。表紙には好きな絵を描いてもいいと思います。楽しい紙ばさみに仕上げてください。



中に新聞紙をはさむ



少しアレンジしました。  
 ・角を丸くしてけがの防止。  
 ・厚紙を貼るとき、一センチくらいすき間を開けて、厚紙をもたせる。  
 ・おしゃれにデコレーション

※こんな方法もありますよ・・・



1



2



3

教科書に載っている紙ばさみとは別の作り方です。この紙ばさみは机の上に置いた下敷きの下に入れておきます。一枚書くごとに新聞の間にはさんでいきます。書いた作品を紙ばさみにはさんだままケースに曲げて入れ、持って帰ることもできます。しかし、この紙ばさみを折ってしまうとその折り目で下敷きが平らでなくなり、書きにくくなるので、折らないように気を付けていくと、繰り返し使えます。また、新聞を購読していない家庭もあるので配慮が必要です。

- ① 新聞紙（夕刊一回分くらい）を真ん中で切ります。（裁断機を使ってもいいですね）
- ② 折り目のある方の端をステープラーで二か所ほど留めます。
- ③ 折り目のある方を上にと紙ばさみになります。

○雑巾・・・方が一、墨をこぼしてしまったときに拭き取るのに使います。

以上、書写のセット以外での準備物は、**ふたの付いた広口のビン**（教材費や実習材料費などで予算計上できれば、理科で薬品入れとして使われているプラスチック製のビンが安価で使えます）、**洗濯バサミ**（ごく普通のV型のもの）、**紙ばさみ**、**雑巾**です。また、毛筆書写の学習をする日は方が一のことを考え、汚れてもいい服装で来るように伝えておきます。

もし、墨が服についてしまった場合は、なるべく早く早く洗うことが大切です。練り歯磨きを古い歯ブラシにつけて、汚れた所をこすり、その後洗濯します。練り歯磨きには研磨剤が含まれているので、多少は汚れが取れます。また書道用品を扱う店や大型スーパーなどで、墨落とし用の洗剤も売られています。

あと、教室での準備として、**空のバケツを二つ**、**教室の前後に**、**新聞紙を敷いた上に置いておきます。**

**机の上の準備ができれば、次は、「書く準備」をします。**

- ① 机の上の準備をする。
- ② ビンの中に、水を入れる（半分より多めに）・・・（七分目くらいです）・・・
- ③ 硯の「うみ」に墨液を入れる。
- ④ ビンの水をスポイトで吸い、硯の「りく（おか）」に数滴落とし、墨を磨る。
- ⑤ 磨れた液を「うみ」に入れて、墨液と混ぜる。
- ⑥ 心を落ち着かせて、待つ。

セットの中の硯は、表裏両面使えるものがあります！



「りく」の部分が広く、墨を磨らせるときに使います。

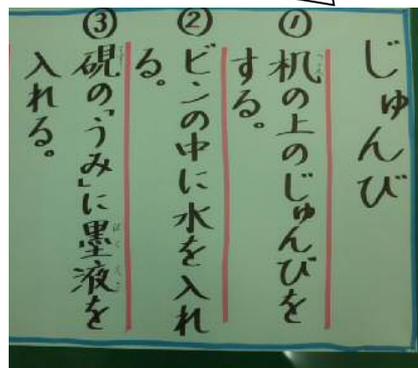
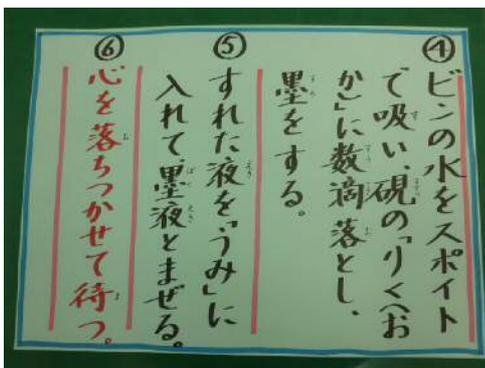


「うみ」の部分が広く、墨液だけを入れるときに使います。「ふでならし」の突起がついています。



矢印のように上下に動かして磨ったり円を描くように磨ったりする方法があります。

準備の仕方を画用紙に書いて、定着するまで掲示するといいですね。最初は一つ一つ丁寧に確かめながら準備するようにします。



## ⑤ 用具を実際に使ってみる。

準備ができたなら、いよいよ実際に毛筆を持って書きます。まず、**大筆を三分の二程度までほぐします**。小筆は初めのうち  
は使いません。この時丁寧にほぐさないで毛の根元から折れてしまうことがありますので、穂先から少しづつほぐします。  
かぶせていたキャップは処分します。

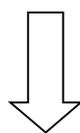
ほぐせたら、いよいよ書き始めます。**まず、姿勢と持ち方を正しくします**。次に、筆に墨液をつけますが、ある程度思い  
切りよく、**たっぷりつけて、墨液を十分毛筆になじませてください**。ゆっくり筆を上げると、ポタポタとしたりますの  
で、その分だけ**硯の端で落としながら穂先をそろえていきます**。

まずは自由に、いろいろな線を書きます。

次に、いろいろな太さの線を書きます。(どちらか一方をします。)



線だけでなく、文字を書いたり模様を描いたりして、毛筆で書く感覚をつかみます。この時も、正しい姿勢と持ち方で、筆を立てて書くことは必ず守るようにします。



半紙の上下端に線を書き、次に真ん中に書きます。その後は、線と線の間中央に線を書き足していくのを繰り返します。隙間がどんどんなくなっていくと同時に、線が細くなっていきます。

半紙の一番上に、その筆で書ける一番太い線を書きます。次にその下に、半分の太さの線を書きます。その下にさらに半分の太さの線を書きます。それを繰り返して、何本書けるか試みます。



ここで大切なことは、この活動をするので、**一本の筆で、いろんな太さの線が自由に書けることを実感させる**ことです。

こんなに幅広い太さの違いがある線をたった一本で書けるのは、毛筆ならではの利点です。まさに「魔法の筆記用具」であることを体験させてください。そしてここで「筆圧」という言葉を指導してください。

さて、①からここまで書けたところで、おおよそ二時間くらいかかるかと思いますが、（もったかかるかもしれませんが、話の時間や書く時間を調節してください）

## ⑥ 用具の後片付けの仕方を知る。

最初は教師が一つ一つ丁寧に手本を示しながら教えてやってください。準備と同じように、後片付けの仕方を書いて、掲示し、定着を図ってください。

- ① ビンの水で筆をゆすぐ。（小筆はゆすがない）
- ② 硯の中に余っている墨液をビンに入れ、ふたをする。
- ③ 要らない紙で硯をふき取る。
- ④ 小筆は要らない紙を四つに折ってスポイトに残っている水で濡らし、その上を、穂先をそろえるように拭いていく。
- ⑤ バケツの所へピンを持っていき、バケツの上でふたを取り、低い位置から水を流す。空いたピンにふたをして座席に戻る。（ピンを洗う必要はありません）
- ⑥ 筆は筆巻きに片付け、下敷きはしわになったり折れたりしないようにケースに入れる。
- ⑦ そのほかの道具をケースに入れる。教科書を片付ける。

この方法で片付けると、筆を持って移動することはなく、手を汚すこともありません。書写の学習が終わった後、子どもたちの手を見てください。汚れている子どもは用具の扱い方が雑なことが多いようです。



## 第二時の学習

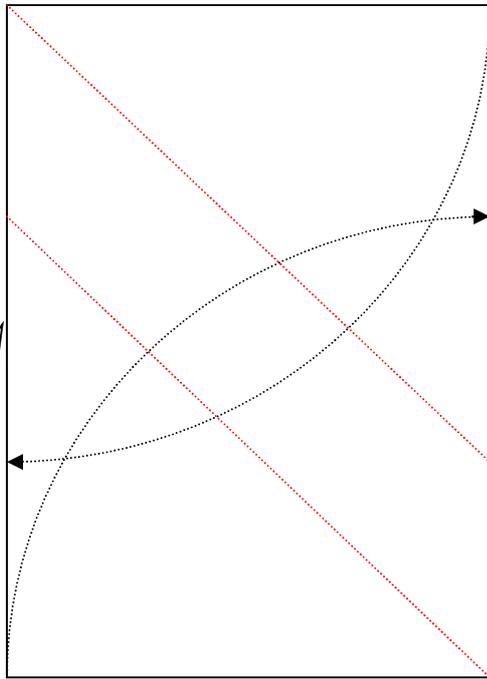
前時の学習で、いろいろな線を書いて、一本の筆で、自由に太さを変えて書くことを体験しました。次は、横画の筆使いにも通じる、「穂先の向き」の学習をします。

### 穂先の向きはいつも左なめ上

これから学習する、横画、縦画、はらいなど、どの画も書き始めの穂先は左なめ上になるように指導します。ずばり「始筆」の向きなのですが、ここではまだ始筆・送筆・終筆の言葉は出てきません。でもこの「左なめ上」の向きはこれからの学習の基礎基本になりますからここでしっかり意識づけたいものです。

#### 指導の実際

(準備・後片付けは先述した通りですので、ここでは省略します)  
半紙を図のように折ります。



半紙の右上と左下の角を矢印の方向へ谷折りして、赤線のような折り目を付けて元に戻す。



折り目の線に合わせて筆を置き、線を書いていきます。横画だけでなく、縦画・はらいなど、どの画も筆の穂先の向きは同じであることを意識させてください。上下を返して書くこともできます。

角度的には45度ですが、「時計の10時と11時の間」と伝えると分かりやすいと思います。

このように、何本も線を書きながら、穂先の向きを一定にさせることをめあてとして、第二時とします。そして、第三時は、横画の筆使い「一 二」の学習に入ります。ここから先は一定の学習の流れにそって、進めることになります。

## 四 日常の毛筆書写学習の進め方

三年生の教科書一ページに、「学習の進め方」が示されています。この進め方を知ること、**学習過程を身に付け自力解決していく力がつきます**。そして学習に見通しを持って安心して学習を進めていくことができます。では、具体的にどのような進め方をしていけばよいか、具体的に示していきます。

### ① 準備をしよう

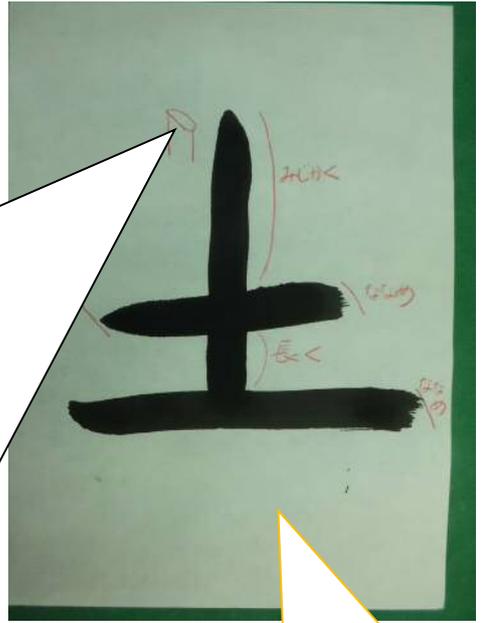
準備については前に説明した通りです。持ち物には全て名前を書くこと、準備図や準備の仕方の説明を定着するまで掲示します。準備は五分程度でできるかと思えます。用具を忘れた子どもがいることもあるので予備のセットを保管しておきます。

### ② 学習のめあてを知って、**試書（ためし書き）**をしよう。

教科書の各単元のページの下に、硬筆で書く欄がありますので、そこにためし書きをします。また、毛筆でも、教科書を見ずにためし書きします。書くときは、正しい姿勢・持ち方、筆順を意識させてから書き始めます。

### ③ **基準を確かめて、**考えよう

赤鉛筆を用意します。教科書の教材文字と自分のためし書きをよく見比べます。そして直すところを赤鉛筆でチェックします。チェックの仕方は、線を引いたり言葉を入れたり矢印を入れたり、自分で分かりやすく工夫して、書きこんでいきます。下敷きを敷いているのでフワフワして書きにくいかもしれませんが、自分で分かるように書きこんでいけばよしとします。



この場合は「縦画の筆使い」で穂先の向きが「左ななめ上」になっていないことや、横画の始筆・終筆にも課題があること、そして、一画目より上の出方が長い所が「めあて」になります。

基本的に、一回の学習で半紙を四枚配布します。一枚目は「試し書き（**試書**）」です。教科書を見ずに、姿勢・持ち方を正しくしてから書きます。書けたら教科書の文字と比べて、直す所を自分に分かるように赤鉛筆でチェックします。この時、チェックするポイントを伝えることが大切です。例えばこの「土」では「縦画の筆使い」ができているかが最も大切なチェックポイントになります。そして、チェックしたことについて友達と伝え合ったり発表したりします。友達の発表を聞いて、新たなチェックポイント（直す所）を見つける子どももいます。

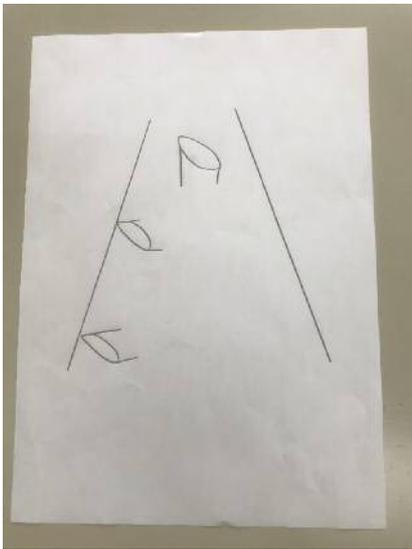
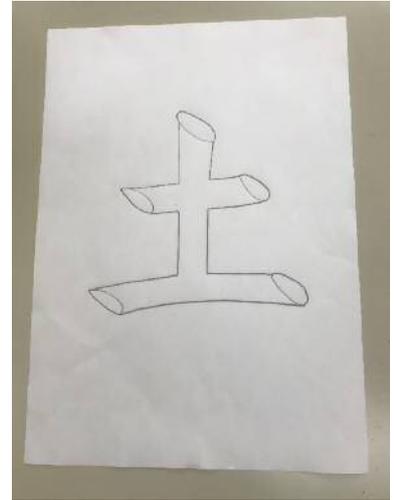
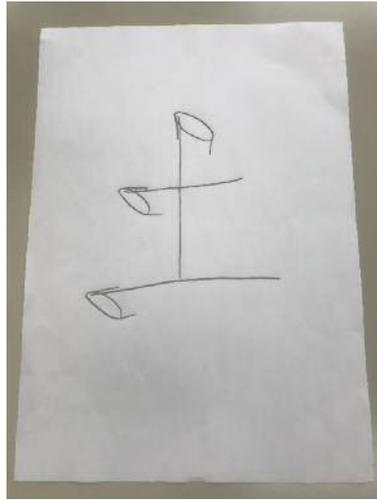
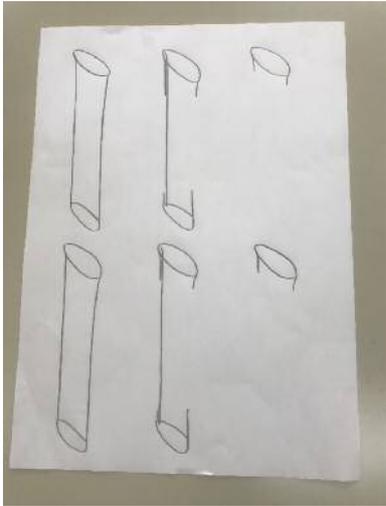
この、「直す所」が「自分のめあて」になってきます。この達成に向けて、二・三枚目の「練習」につなげていきます。

④ **練習**をしよう

自分のめあてが明確になったら、いよいよ練習開始です。練習方法として、いくつか紹介します。いつもこれをすべて準備するのは大変ですから、子どもたちの実態や、単元の目標に応じていくつか選択し、「練習コーナー」として、子どもたちがそこへ行って練習するようにします。自分のめあてに合わせて練習方法を選ぶので、子どもたちも意欲的に練習することができます。

ア **ワークシート コーナー（字形・筆使い・中心の練習に）**

教科書の指導書についているDVDにワークシートがあります。各単元ごとに四種類ほどありますのでそれを印刷して使います。印刷の仕方としては、**B4コピー用紙に印刷して**、上に半紙を置いて敷き写して書く方法と、半紙に直接印刷して書く方法があります。



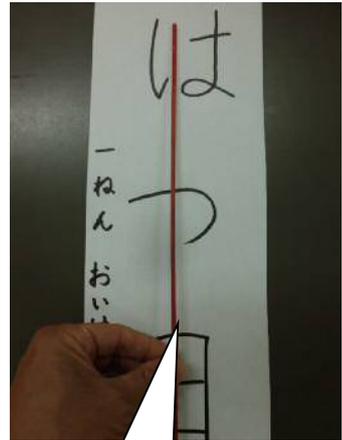
ワークシートコーナーを選んだ子どもたちには、全種類取らなくともよいことを伝えるようにします。また、同じ種類のもを複数枚取ってもいいのですが、ある程度制限を設けた方がいいでしょう。

各学年のDVDには、姿勢や持ち方、ワークシート、(毛筆・硬筆)、運筆動画など、指導に役立つ資料がたくさん入っています。ぜひご活用ください。

半紙に印刷される場合、気を付けていただきたいことが二点あります。一点目は、半紙一箱には、二十枚ごとに青く細長い紙がはさまれていますので、それを取り除いてから印刷機にかけること。「薄紙」設定でゆっくり印刷してください。もう一つは、一回書いて終わりにせず、重なっても良いので、余白に何度も書いて練習させることです。半紙の無駄使いの無いようにしたいものです。(半紙の質によって印刷できないこともあります。)

数種類の中から自分のめあてに合ったワークシートを選びますが、慣れてきたら自分でワークシートを作って練習するのもいいですね。大切なことは、「自分のめあて」に合ったワークシートで練習することです。

① 中心くんコーナー（文字や行の中心を確かめるために）



竹ひごを半紙の縦の長さ程度に切って赤く塗ります。試書ができたならこれを行の中心や文字の中心に置き、教材文字と見比べます。教科書の教材文字の書かれているページには、上下に黒い点が記されています。これを直線でつないだら中心線になります。この写真では、「は」が少し右にずれているのが分かりますね。

② 分解文字コーナー（字形・画の方向・接し方の練習に）

教材文字をB4サイズに、できれば画用紙に拡大コピーしたものを、一画ずつ切り取ります。それを筆順にそって半紙の上

必ず教材文字を横に置いて、よく見ながら置いていくようにします。人数によっては二〜三か所設置するとよいでしょう。

大きくコピーし、裏に磁石を貼れば、板書としても活用できますね。



基本的には一画ずつ切り取りますが、単元によっては「へん」と「つくり」などで分けることもできます。

画が接したり交わったりしていることが多いので、一画ずつのコピーのためには、何枚かコピーしないといけませんね。

① 水書コーナー（字形・筆使いの練習に）

教師が使う「水書板」を半紙サイズにした水書用紙が安価で売られています。できるだけ多く準備しておき、子どもたちに使わせませす。乾くと何度でも使えるので、失敗を気にせず練習することが出来ます。このコーナーで練習するときも、きちんと座り、持ち方も正しくしてから書くようにします。空いているところにも練習できます。書き終わった後は近くに置いて乾かし、乾いたらまた使います。予備の児童机を使うとよいでしょう。また、この時使う筆の穂先を赤く色を付けておくと、穂先の通り道がよく分かります。

② 色砂コーナー（字形・画の方向の練習に）

実習材料費などで、色砂を購入し、バットに薄いめに敷き詰めます。教材文字を見ながら、指で砂の上に書いていきます。失敗しても砂をならすだけで、何度でも書けます。

③ チョークコーナー（硬筆との関連に）

主に新出漢字の学習で使う一マス黒板を子どもたちに使わせませす。日常（硬筆）へのアプローチとして有効です。ここでも「どめ」「はね」「はらい」などの基本点画も毛筆学習で学習した通り、しっかり書くことが大切です。



どのコーナーでも、正しい筆順で書くようにご指導ください。

① 動画コーナー（字形・筆使いの確認に）

指導書のDVDに収録されている運筆動画を、自分で操作しながら見て、筆使いを確認します。動画には墨液で書いているものと、穂先だけ墨液をつけて書かれているものがあります。書いているところを見るのはとても良い学習方法の一つです。書いている早さも確認することができますね。

各コーナーへの移動が伴うので、二十二ページにある通り、移動通路について予め指導しておきます。また、友達同士、教え合う場面も出てくるのですが、大声にならないように指導します。これも最初の指導が肝心です。それと、子どもたちの興味本位でコーナーを選ぶのではなく、めあてに合ったコーナーに行く（一か所でなくてもいいです）ように指導します。また、練習コーナーは、廊下に設置することも可能ですが、周りの教室や通風の邪魔にならないように配慮が必要です。順番待ちになる場合は、時間の有効利用のため、他コーナーへ行くように指示します。教師は子どもたちの練習の様子を観察しながら適宜助言・支援していきます。他にもコーナーを考えて設置してみてもいいですね。

⑤ まとめ書きをしよう

最初に配布した四枚のうち一枚目は「試し書き」でした。二・三枚目は「練習」でしたが子どもによっては半紙を使わなかった子どももいると思います。しかし、どの子どももしっかり練習していますから、全員、最後の一枚として「まとめ書き」に取り組みます。

この一枚を書いているときは、一切の私語を禁止し、姿勢や持ち方を確認したら一齐に書き始めさせます。教室には筆を運ぶ音だけが聞こえ、とても凛とした緊張感が生まれるようにします。この**緊張感漂う教室**の雰囲気には、子どもたちの表情も真剣になります。

書き終わったら子どもたちから「ふうっ」という声が聞こえてくるでしょう。でもまだです。**名前も丁寧に書くように指導します**。名前も書き終わったら、**何名かの子どもを試し書きとまどめ書きの作品を黒板に掲示し、頑張ったことや上達したところなど、思いや考えを伝え合います。**

作品提出は**試し書きとまどめ書きの両方を提出させ、評価の時の参考にします。**

評価については、「学習目標に沿って書くことができたか」「子ども自身が設定しためあてを解決するように書くことができたか」ということを大切にしてください。「のびのびと書けた」「堂々と書けた」「力強い作品ができた」「優しい線で書けた」などは感性的で、書写の評価ではありません。

⑥ **こう筆で書こう**

教科書の硬筆で書く欄に学習したことを生かして硬筆で書きこみます。授業の終盤ですから、あまり長時間硬筆に充てることはできませんから、ごく簡単にしていただいて結構です。でも硬筆に取り組む時間は、少しでも必ずとってください。

⑦ **ふりかえろう**

教科書の「ふりかえろう」の欄に、自己評価させます。

⑧ **後片付け**

丁寧に後片付けをさせます。



**生活に生かそう**

書写の時間以外での「書く活動」の時に、書写学習で身に付けたことを生かして書いているか、指導・評価します。また、「書く活動」では、鉛筆だけでなく、ボールペンやカラーペン、筆ペン、筆、太いペンなど様々な筆記用具を使います。大切なことは、場に応じて、何を、どこに、どんな筆記具で、どれくらいの大きさで、縦・横どちら向きに書くかということを選択して書く力をつけることです。

## 五 水書について

平成二十九年告示の新学習指導要領解説の「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で、低学年において、適切に運筆する能力の向上につながるよう指導を工夫することが示され、その方法の一つとして、「**水書用筆等を利用した運筆指導**」が取り上げられています。一年生の教科書には水書用紙が綴じこまれています。ここでは、水書について詳しく紹介します。

## 水書用筆

水で文字を書くための筆としては、主に絵筆と同じように筆に水を含ませて書く筆と、筆ペンのように軸の部分に水を入れて書く筆の二種類あります。絵筆を水書用筆として使うこともできます。



筆跡を比較すると・・・



鉛筆



フェルトペン



水書用筆

水書の場合は筆圧を変化させる点画が分かりやすく（特に「払い」）、児童の自己評価や相互評価、教師の評価にも役立ちます。

水書の特性として、

- ① 墨を使わないので、手や衣服を汚す心配がありません。
- ② 時間の経過とともに筆跡が消えるので、繰り返し練習ができます。
- ③ 筆の弾力性を体感でき、鉛筆で書くときも無理な力を入れずに運筆できるようになります。
- ④ 鉛筆の持ち方が改善されます。

水書用筆の購入に際して、軸の太さ・長さが鉛筆に近いもの、穂の長さが小筆より短めのものが良いでしょう。また、学校で準備・貸し出しする場合は、管理・保管が簡単なもの、さらに、低学年が使用するため、水の扱いが簡単なもの、という観点から選ぶようにしましょう。

## 水書用紙

一年生の教科書に付いているので、それを使うようにしますが、文具店や書道用品店などでも市販されています。水に濡れると色が変わり、乾くと元に戻るため、何度でも繰り返し練習できます。令和二年度の一年生は、ついている水書用紙を切り取って次年度に持ち上がることができですが、令和二年度の二年生には準備する必要があります。学校で購入する場合はA5サイズくらいにして、保管しておき、使用後は十分乾かしてから片付けるようにしましょう。

## 用具の持ち方

軸を持つ位置、軸の傾き、握る指の形などの「持ち方」は、**鉛筆と同じ**にします。小筆の持ち方のように鉛筆よりも立てて持つ必要はありません。

## 指導のポイント

A 横線・縦線・折れ線・波線・絵やイラスト・螺旋などを書いてみる。

(筆記具の弾力を楽しみ、慣れる。)

(筆圧による線の太さの変化を確かめる。)

(硬筆につながるよう、鉛筆と同じ持ち方で書く。)

B 教材を指導するときのポイント

(指先や手の運動、水書用筆の扱いについてのウォーミングアップを段階的に行う。)

(水書用筆と硬筆を交互に使い、硬筆に生かすようにする。)

(「**運筆を体感するための学習**」をとらえる。)

低学年での水書用筆を活用した指導例

① 試し書き（試書）・・・鉛筆

「合言葉」を取り入れ、正しい持ち方・良い姿勢で試し書きをする。

② 課題把握・・・基準の確認、本時のめあてを知る。

試し書きと基準を比較し、自分の課題を持つ。

③ 練習・・・水書用筆でウォーミングアップ

水書用筆と鉛筆を交互に使い、めあてに沿った練習をする。

④ まとめ書き・・・鉛筆

⑤ 自己評価・相互評価

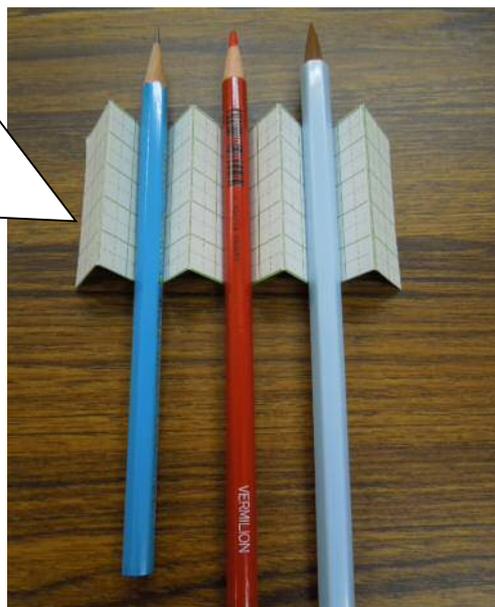
めあてについてのみ評価する。水書用筆での評価はしない。

⑥ 日常生活に生かす。

他の文字を書く際に、学習したことを生かすようにする。

\*教科書及び指導書を参照し、指導を工夫してください。

（参考 水書用筆等を活用した書写指導法検討委員会資料）



硬筆学習の際は、このように工作用紙を使った筆置きを利用すると良いでしょう。  
この筆置きは、縦5cm、横16cmの大きさの工作用紙を蛇腹に折っています。フェルトペンもここに置くことができます。

# 六 発展学習として・・・

書写学習で身につけたことを生かして、次のようなことをされてはいかがでしょうか。

- ① 色紙や短冊、団扇に、好きな言葉や俳句、短歌、詩などを書く。
- ② マーキングで模様をつけた画用紙に好きな言葉を書く。
- ③ 石や消しゴムではんこ作りをして作品におす。

生活に潤いを・・・

硬筆書写作品展・京都市児童作品展・書き初め展への出品に際して

必ず選外になるもの

- ・二度書き
- ・誤字、脱字
- ・作品規定外（課題・用具・用紙・大きさなど）
- ・数書きし
- ・コピー作品

「学校代表作品」が審査基準に達していないものが多く見受けられます。学校代表作品としてふさわしいものを出品してください。

審査基準

- ・基本点画（とめ・はね・はらい・点画の付き方など）がきちんと書けているか。
- ・文字の大きさは用紙や行の大きさに合っているか。
- ・行の中心は真っ直ぐ通っているか。
- ・字形は正しく整っているか。
- ・接筆は正しいか。



縦画が出る

横画が出る



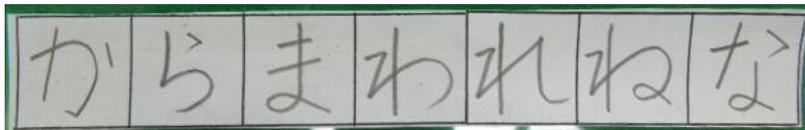
縦画が出る

縦画が出る

# 平仮名の指導に際して

平仮名の字形の指導をされる際に、ぜひその文字の基になった漢字を参考にしてください。

ん	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
无	和	良	也	末	波	奈	太	左	加	安
	ゐ	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
	為	利		美	比	仁	知	之	幾	以
		る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
		留	由	武	不	奴	川	寸	久	宇
	ゑ	れ		め	へ	ね	て	せ	け	え
	恵	礼		女	部	祢	天	世	計	衣
	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
	遠	呂	与	毛	保	乃	止	曾	己	於



※特に誤字や字形の間違が多い平仮名

基になった漢字の字形や画の長さを見れば、なぜ誤字なのかわかりますね。

な 三画目は一画目より下に書く。

ね・れ・わ

一画目と二画目は必ず三回交わる。

ま 一画目より二画目の方が少し短い。

ら 一画目を最も上に書く。

か 三画目は「」のように短くならず、一・二画目

と三画目の間が詰まらないように書く。

この資料は、これまで長年にわたって京都市小学校書写教育研究会が研究してきた成果を、広く全市の教職員の皆様にご活用いただくために一冊にまとめたものです。ご活用の際して、この資料の全部または一部を複写していただいたり、研修会などで参考資料としていただいたりしても結構です。また、資料の内容についてご質問などがありましたら書写教育研究会にご連絡ください。

資料作成 京都市小学校書写教育研究会  
資料作成協力 京都市小学校書写教育研究会OB会

資料作成文責 達富 裕司